



大阪公立大学共同出版会

ニュースレター

No.22

Osaka Municipal Universities Press (OMUP)

目 次

・ 理事長 新年の挨拶	三田 朝義 …… 1	・ 新刊書の紹介 …… 6
・ OMUP新春インタビュー 河内 明夫 教授		・ 電子書籍に対する一考察 編集長 金井一弘 …… 6
インタビュー：常務理事 平澤 栄次 …… 2		・ 編集後記 …… 6
・ 自著を語る（3） 常務理事 小股 憲明 …… 5		

理事長 新年の挨拶



OMUP理事長 三田 朝義

大阪公立大学共同出版会（OMUP）会員の皆様、2011年の新しい年をお健やかに迎えられたことと拝察申し上げます。OMUPは、今年で創立11年目を迎えますが、これまで80冊に上る本を出版して参りました。これもひとえに会員の皆様の厚いご支援の賜と感謝申し上げます。

2008年のリーマン・ショックが引き金となった世界金融危機によるデフレスパイラルが依然として収まらない非常に厳しい世の中が続いています。一方、活字離れが加速される中、ソニーの「Reader」、アマゾンの「Kindle」、アップルの「iPad」等の電子書籍が相次いで普及し始めた中であって、出版界全体にとって非常に厳しい状況が続いています。しかしながら、電子書籍が成功しているのはコミ

ックと辞書だけとも言われています。これは大学出版会での出版物と電子書籍との棲み分けの可能性を示唆するものかもしれません。

約一年前に、在阪の某書店で立ち読みして買った「悩む力」（集英社新書）という本を上梓した姜尚中氏は、その本の中で“過去の高度成長は望めない衰退の予兆が見え隠れする時代にあって、悩みの中から生きる力を引き出そう。”と提言していたと記憶しています。このベストセラーにもなった本は日本人の時代の本質を捉えたもので、まさに“眼から鱗”の経験は活字文化あってこそそのものと鮮明に覚えています。昨年暮れに、新聞紙上で戸田盛和氏の訃報を知り、手元にあるずいぶん前の「エントロピーのめがね」（岩波書店）という本を読み返しました。その中で、“人間の頭脳がなし得る可能性と広さの関係は、まことにパラドキシカルなものである。”との物理学者らしい言葉は、今の社会にも通じるものと改めて思いました。活字によって養成されるであろう知を創造する力は、大学教職員のみならず大学で学ぶ学生にとってこれから先も不可欠なものと思います。

新年早々、駄文を並べましたが、今後とも大学出版会にふさわしい良書を出版する努力を続ける所存でございますので、OMUPにいっそうのご支援を賜りますようお願い申し上げます。

OMUP 新春インタビュー

大阪市立大学大学院理学研究科 教授
大阪市立大学数学研究所 所長

河内 明夫

インタビュアー

大阪市立大学大学院理学研究科 教授
OMUP常務理事

平澤 栄次



河内 明夫 教授

結び目理論とは

平澤常務：あけましておめでとうございます。今日は本当にお忙しいところありがとうございます。

河内教授：あけましておめでとうございます。

平澤：私どもOMUP（大阪公立大学共同出版会）を作りましてちょうど10年になりまして、また特定非営利活動法人（NPO）にしてから5年目になるんですが、その間、河内先生には数学研究所の立ち上げに伴っていろいろな国際会議のプロシーディングをこのOMUPから出していただいて本当にありがとうございます。

本日はまず、COEに採択されて理学部全体が非常に沸き返った時に数学研究所を立ち上げられて、その時から今までとくに結び目理論を中心にしてどういうことをしてこられたか、お聞かせ願えますか。

河内：まずは、結び目理論の登場の頃からお話しします。19世紀末頃ですが、物理学の分野でまだ物質の原子モデルがはっきりしなかった時代、エーテル仮説があったところに、うずまき原子説というのがあって、物質は原子が結び目の軌道を描いてできているというふうに考えられたのが結び目理論の始まりで、論文なども出されています。しかし、エーテル仮説自体が間違っているということになって、原子モデルの登場とともに結び

目理論は下火になったのですが、ちょうどそのころに、数学の中にトポロジーという学問が起ってきて、結び目理論は、その中で細々と研究されてきたわけです。ですからこれはマイナーな学問だったのですが、それでも数学で学問の名前がつくぐらいのすごく偉い先生方により研究されていました。

平澤：その先生方というのは国内の方ですか。

河内：いや、日本では、1958年頃ですね。寺阪英孝先生って私の先生にもなるんですけど、その先生が日本で初めて研究された。私が研究を始めたのが1970年代ですけど、それでもまだ全くマイナーな学問で、これでは飯は食えないと言われていました。私は1978年にプリンストン高等学術研究所というところから呼ばれるんですけど、それはまあ、だれかと名前間違えたんじゃないかというような（笑）。

平澤：そんなことないでしょう（笑）。

河内：それぐらいマイナーな学問でした。でもあちらへいって見て、どうやら将来的にはすごく重要な学問になるだろうと感じました。当時すでにそのことをアメリカでは知っていたような気がしますね、今思うと。あちらへ2年間行って、研究して、帰ってきたんです。そのころから、結び目がいろいろな数学のモデルとして使えることから、すごく優良な学問だと認識されるようになってきた。結び目理論はいろんな学問が進んだところで適用できるんですよ。

平澤：ああ、そうなんですか。その点でも先見の明があったんですね。もうすこし内容をお聞かせ下さい。

河内：その後、理論物理のヤン・バクスター方程式というのがありますが、その方程式の解が基本的に結び目の不変量を与えるというのが、1985年ぐらいから出始めました。生物でもDNAで結び目ができるというのもちょうどそのころなんです。ですから1980年代中ごろから1990年ぐらいになると、結び目理論の重要性というのは広く認識されるようになったといえると思います。

平澤：前に先生のHPで見させていただいて、DNAに結び目理論が応用できると聞いて、私は全然ピンと来なかったんです。

河内：トポイソメラーゼの作用の仕組みは、結び目理論を使わないとわからないじゃないですか。

平澤：ああ、そうか。DNAのトポイソメラーゼのトポロジーですね。

河内：DNAを紐に見立てて、トポイソメラーゼを作用させて、どういう結び目ができるのかを調べて、トポイソメラーゼがどういう作用をしているのか決定してるわけですね。

平澤：ああ、確かにそういわれたらそうですね。

河内：そういうふうに、結び目というのはいろいろなものの基本にある現象だというのがだんだんはっきりしてきた。数学の結び目は科学の中でも研究されるべきものだということが、ほぼ定着し始めていると思います。今世紀中に研究が飛躍的に進むだろうと思っています。

結び目理論の普遍性

平澤：先生は結び目理論で研究会を作って結構長い間中心になって活動されていましたが、もうあれからずいぶんたちますよね。それだけ長く続けてこられたこの理論についてもうすこしお聞かせ下さい。

河内：純粋数学の研究は普通数学の中だけで完結するのですが、結び目理論は、純粋数学としてはめずらしいことですが、他の科学の学問分野の中に拡大しているのです。私は物理も生物も化学もあまり知らないのですが、近年、ソフトマター物理、分子化学、生物物理の分野の国際会議や学会で講演しています。結び目理論というスペシャルなところを掘り下げていったら、かえって拡がりをもってきた。最近は学問が非常に細分化されて難しいじゃないですか。ですから数学、物理、生物、化学をまたぐなんて、普通は不可能です。私は結び目のことしか知らないのですが、その私が物理、化学、生物からも呼ばれているところを見ると、数学の結び目理論は自然科学の基礎理論として重要であることが、認識されるようになってきているといえる、と思っています。

平澤：自然科学の中でも基礎分野の中の基礎理論はやっぱりいろんなところに拡がっていきますよね。

河内：結び目を自然現象として考えるわけですね。そこにあるのは紐の結び目や絡み目、絡んでいる状態なんですけど、それは見る者によってちがって見える。それと3次元的な結び目一つひとつが3次元の宇宙なんですよ。4次元宇宙について、この間、日本数学会主催の市民講演会で講演したときにいったことですが、宇宙の大規模構造、あれだって分子と同じような形をしていることが知られていますね。時間を無視して、3次元宇宙として大規模構造を見ると分子と同じようになっている。もっと複雑ですけどね。

平澤：生物の世界でもエボラ出血熱とかね、ああいうウイルスと結び目とどうやって結びつくかなあと考えていましたけど、こうやって聞くと、あ、そうかって。

河内：最近あのウイルスのように両端（たん）が開いた紐の結び目を研究しています。先週も韓国で講演してきました。

結び目理論の教科書作り

平澤：すこしお聞きする方向が変わりますが、ご講演などのほかにも、先生としてこの数学研究所のいろいろな発見や進歩を今後どんなふうに社会貢献するかということで、お考えになっていることがあれば、お聞かせ下さい。

河内：社会貢献として、結び目をどういうふうに教えるかにつ



いての教育実践の本を英文で出そうとしています。『Teaching and Learning of Knot Theory in School Mathematics』、こういう本を作っています。結び目がますます重要になっていくとすると、次は何歳から結び目を教えるべきかという問題が出てきます。大阪教育大学の柳本朋子先生と私が共同編集する本です。小学校、中学校、高校、あと大学の教養や教員養成系で、どういうふうに結び目を教えたらいいかについて、大阪教育大学名誉教授の岡森博和先生や大学や高校・中学の数学教育関係の先生方を含めた研究グループで、教育実践を通して研究してきたのですが、それらをもとにまとめたものです。日本語で報告書を3冊出しましたが、OCAMIシリーズを出版していただいているOMUPから、それらを一つにまとめて英語にして、この度出版することになった次第です。

平澤：それは小学校、中学校へのすごい社会貢献ですね。そのテキストの中身についてですが、たとえば今おっしゃった小学生、私らは小学校の時に三角形がどうこうってやりましたが、幾何学ですよ、それに相当するもので小学校での結び目の授業もありうるということですか。

河内：それは空間感覚をどういうふうに養うかという教育への問いかけです。たとえば、幼稚園児とか小学生が絵を描くと最初平べったく（2次元的に）なります。それがあある段階で（3次元）空間のものをどう表現しようかと葛藤を始めます。そこで、立体図形と結び目を描くのとどちらが易しいかが問題になるわけです。伝統的に立体図形を小学校で教えているわけですけど、それはすごく難しい。たとえば、立方体だと平行の線がいっぱいあって、しかも見えない線をどうするか。

平澤：たしかにね、私も立体幾何学がとても苦手だったから、小学生のころは頭の中で立体を組み立てられませんでしたね。

河内：見えない点の問題とかあるでしょ。それが結び目の場合は、上下をつくるだけで3次元を表せる。これは人工知能の3次元認識にも応用されていると聞いています。そこで、とくに小学

生だと、何歳から教えたらいいかというのがあって、大体小学校3年生ぐらいから教えたらいかどういいんじゃないか、という報告になっています。

平澤：要するに立体を頭の中で考える時に、今までのような幾何学よりも結び目の方が考えやすいということですね。

河内：そうなんです。結び目っていうのは、線が真っ直ぐでも曲がっても、太くても細くてもいいんです、それは位置を問題にしているだけなので。ですから誰でも描けるんです、上下だけを注意すればいい。

平澤：こう描いたときに紐が後ろだか前だかわかりますよね。

河内：それだけわかればいいんです。それが3次元なんです。それに慣れるとまあ4次元も理解しやすい。結び目は3次元ですから、それが動いてくのが4次元なんです。結び目の専門家は、結び目の動きについての時間のトレース（軌跡）をみることで、4次元的にどうなっているか研究しています。ですから3次元空間内の自分を結び目のように考えると、4次元的にどうなっていくか、という研究もできるわけです。

私は『OCAMI Studies』Vol.1の中で、結び目の柔軟性に着目して、結び目理論による「心の結び目」モデルを提起しています。昨年暮れですが、ある研究者から、人間の創造性と「心の結び目」の複雑度が符合する（つまり、「こころの結び目」が複雑な人ほど創造性が減退する）という調査研究結果を受け取りました。

平澤：いやーすごい。わたしには全然わかりませんし、ピンときませんが、そうですか。楽しみです。

河内：そのほかに、私どもは高校との連携をやっているし、その関係でいろいろなつながりもできており、結構盛んに活動していますよ。

平澤：たしか高等学校・大阪市立大学連携数学協議会を作られていますよね。本学の中で数学科だけがああいう協議会を作られて、高校と連携されているんで、あれも大した貢献だと思いますね。

河内：高校の先生方が主ですが、中学の先生も来てますよ。今、府内の市立中学でも、教育委員会を通して、実験的に結び目の授業をやり始めています。中学の先生が授業をやるのですが、それを見に来て欲しいと。近くですので、時間が許す限り大学を抜け出して行くことにしてます。

平澤：先生は本学の看板だから、いろんな市民講座とか国際会議とか、いつも出ておられるのを私も知ってまして、どうですか。

河内：忙しくて大変です。

平澤：そりゃ大変でしょう。体がいくつあっても足りないでしょうね。ところで、今度の教科書を、日本語よりも先に英語で出版されるということについてはどのようにお考えでしょうか。

います。それだけでなく、結び目をどういうふうに学校で教えるかという本は、恐らく世界ではじめての本ですから、そういう本を国内だけに閉じていたらいかんわけです。しかもこの教科書については、アメリカやドイツなどの外国の高名な数学教育の先生達から関心が示されており、英語での出版の必要性を痛感して

いました。しかし、外国から本を出すのは大変で、そういうときに英語の本もOMUPで扱ってくれているので、うちとしては助かっています。うまくいけばまたそれを日本語に訳すかもしれません。

平澤：手前みそですが、これまでもなかなか本屋で引き受けてくれないような出版物をOMUPで足立先生が中心になってやっています。河内先生のOCAMIシリーズは英語ですが、フランス語の学術書も2冊出して、2冊目はフランスの大学出版会との共同出版です。

河内：この“Teaching”の出版についても、ドイツの先生が間に立ってドイツでの共同出版の話も進むんじゃないかと期待しています。

平澤：それは楽しみです。

河内：今回の教科書だけでなく、出版というのは、とにかく国際的に開かれていないとインパクトがないと思うんですね。すでに電子出版の時代なので、少なくとも学術の出版では、日本語と英語と両方出す必要があると思います。日本語だけ出版するっていう発想のあり方は時代遅れの感じがします。

平澤：たしかに、それでは先細りって感じしますね。

河内：日本の出版社が、学術の優良本を多く出して栄えていくには、国際化を目ざすしかないように思います。

平澤：本日は、お忙しいのにありがとうございました。またこれまで、OMUPから結び目理論をはじめ数学の英語の学術書であるOCAMIシリーズを出版していただいて、この場を借りて御礼申し上げます。

河内：OCAMIシリーズは、これからも続けていきたいと思っています。

（学術出版の現状や課題、大阪の現状、大阪市立大学理学部や数学研究所の活動、OMUPへの期待など、話題は多岐、長時間に及んだが、紙数の関係で割愛した。）

写真・取材：OMUP常務理事 足立 泰二

文責：OMUP常務理事 小股 憲明



平澤栄次OMUP常務理事

出版の国際的通有性について

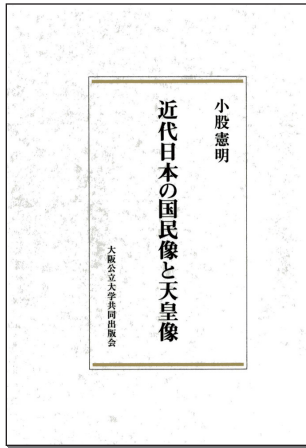
河内：数学というのは、英語で出すのが国際的に普通になって

自著を語る(3)

『近代日本の国民像と天皇像』

『明治期における不敬事件の研究』

OMUP常務理事 小股 憲明

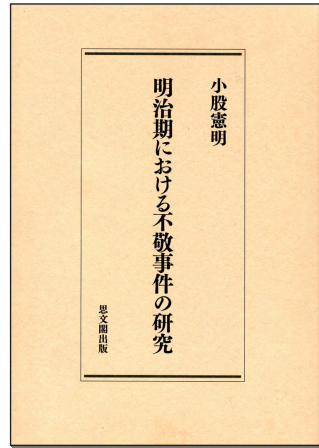


ISBN4-901409-13-1

C3031

定価:本体価格9,000円+税

A5版680頁



ISBN978-4-7842-1501-0

C3031

定価:本体価格13,000円+税

B5版600頁

私は研究生生活の初期から今日まで、近代日本のナショナリズム、天皇と国民の関係、教育と天皇制との関わりなどを、多面的に研究してきた。これまで『近代日本の国民像と天皇像』(大阪公立大学共同出版会)と『明治期における不敬事件の研究』(思文閣出版)という2冊の単著を世に出した。

『近代日本の国民像と天皇像』は、昭和50年(1975)から平成13年(2001)にかけての4半世紀の間に発表した諸論考のうち、近代日本における「国民の望ましいあり方」「あるべき国民の姿」「期待される国民像」と「天皇の望ましいあり方」「あるべき天皇の姿」「期待される天皇像」との照応関係を追求した論文を一書の形にまとめ直したもので、680頁ある。

第一部「公認国民像と天皇像」は、明治10年代から大正期半ばにいたる時期を対象に、帝国議会開設以前については、政権担当者、民間それぞれの国民形成論を、国家像・天皇像との関連において検討している。帝国議会開設以後は、確立された憲法・議会制度という国家体制の中で、議会に現れた国民像=天皇像(国民と天皇の関係)に関わる多くの議事の分析を通して、政府・議会が共通に公認している国民像=天皇像について考察している。

第二部「思想家たちの天皇と国民」は、明六社同人たち、^{さかたに しろし}阪谷素、^{くが かつなん}陸羯南、^{たちばな しらき}徳富蘇峰、橘樸といった近代日本の優れた思想家たちが、天皇と国民の関係をどのように捉えていたかを、それぞれの思想体系全体との関連において考察している。

第三部「近代日本の君主制」は、帝国憲法第3条の天皇の神聖不可侵規定と同55条の大臣責任制・大臣副署制との一体不可分の関係に着目しつつ、国体主義と立憲主義の相互補完性、相即的展開について考察し、帝国憲法と日本国憲法との君主規定をめぐる連続と断絶についても論及している。

本書については、『教育学研究』73巻1号(日本教育学会、2006年3月)、『日本教育史研究』25号(日本教育史研究会、2006年8月)に書評があるので、参照していただければ幸いである。

『明治期における不敬事件の研究』は、平成元年(1989)から平成18年(2006)にかけての20年近くにわたって積み重ねてきた明治期不敬事件に関する論考を一つにまとめ、京都大学から博士(教育学)の学位を授与された学位論文を公刊したものである。

明治期の不敬事件については、第一高等中学校内村鑑三の教育勅語薄礼事件や尾崎行雄文相の共和演説事件などこれまで多く言及されてきた事件もあるが、大多数の事件についてはこれまで何ら言及されことなく、歴史の中に埋もれてきた。本書は、不敬事件228件、参考事例13件に及ぶ事例を発掘し、不敬事件というものが、明治期における一大社会現象であったことを明らかにするとともに、それらの膨大な事例を網羅的・体系的に考察したはじめての研究書である。

本書の構成は、個別の事例研究を行った第1～5章、全体的総括を試みた第6章、および資料編とからなっている。

第1～5章では、帝国憲法発布・教育勅語公布を契機として天皇の権威が朝野を通じて確立したことによって、不敬事件の質が「犯上抗官」的なそれから国民道徳的なそれへと転換すること、不敬攻撃はしばしば社会的身分が下位の者が上位の者を排撃する手段として利用されたこと、学校では頻発する御真影・教育勅語に対する不敬事件を回避するためのノウハウが蓄積(御真影・教育勅語の物神化が昂進)されていったこと、日清戦争から戊申詔書発布までの期間に政権内部で教育勅語再検討の動きがあったこと、議会政治の場でも政敵を排撃する手段として不敬攻撃が利用されたこと、社会共通の価値として確立した「忠君愛国」の具体的ありようをめぐる鋭い対立があったこと、などを明らかにしている。

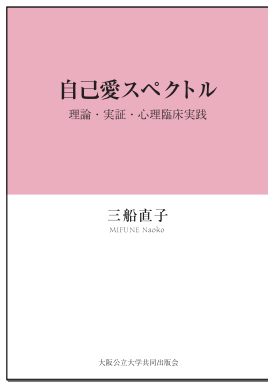
第6章においては、発生した不敬事件の特質に着目して、「Ⅰ民権運動弾圧期」「Ⅱ教育と宗教の衝突期」「Ⅲ忠君と偽忠君の攻防期」「Ⅳ社会主義弾圧期」という時期区分を試みている。その上で、犯罪としての不敬事件か国民道徳としての不敬事件か、何に対する不敬が問題化したのか(教育勅語・御真影・天皇・歴代・国体・神宮・陵墓など)、行為の態様はどうであったか(文書・演説・行為・直訴など)、どのような社会的場で発生したのか(学校・学説・演説・マスコミ・政界・官公庁・外国)、公私の別はどうであったか(公的公然・私的非公然)、攻防関係はどうであったか(上位者による下位者への攻撃、下位者による上位者への攻撃、対等な関係)、攻撃者を受けた側はどのような態度を示したか(謝罪・沈黙・反論)などの分析項目を設定して、収集したすべての事件について網羅的・総合的に検討し、多くの知見が得られた。

資料編には、収集した不敬事件228事例、参考事例13事例すべてについて、その「概要」と「文献」を採録して、学界の共有財産とした。

本書については、『歴史評論』725号(歴史科学協議会、2010年9月)に書評が掲載されており、これからいくつかの学会誌に書評が掲載される予定と聞いているので、お目に触れることがあれば一読下さればと思う。

私にとっては、いずれも思い入れの深い本であるが、本の売れ行きというのは著者の思い入れとはまったく関係ないというのが相場で、この2冊もその通りであり売れていない。

新刊書の紹介



自己愛スペクトル
理論・実証・心理臨床実践
三船 直子著

臨床心理学的観点から「自己愛」の問題を取り上げ、理論的な検討と実証研究により「自己愛」の特質を明らかにした。「自己愛」を心理臨床実践の場である「自己と他者が交わる領域」に立ち現われる鍵概念としてあらたな光を投げかけている。
ISBN978-4-901409-73-5 C3011
定価3,600円+税 A5判 228ページ



橋下知事の「大阪府立大学批判」発言を検証し大学財源を考える
—大阪府「戦略本部会議『府立大学のあり方』」2資料に依拠して—
小林 宏至著
1. 橋下知事の「大阪府立大学批判」発言の三つの内容と検証の方法 2. 事実とかけ離れている橋下知事の主張と府立大学の財源 3. 府民要求を受けとめる視点のない学生不在の府立大学像 4. 公立大学「二重行政」なる批判は正反対の論理に帰結 5. 府立大学財源の強化をめざして。
ISBN978-4-901409-78-0 C1331
定価95円+税 A5判 19ページ

電子書籍に対する一考察

OMUP編集長 金井 一弘
株式会社星湖舎 代表取締役

2010年は「電子書籍元年」と呼ばれました。アマゾンの電子書籍リーダー「Kindle(キンドル)」やアップルの「iPad」が発売され話題となり、年末にはシャープ「GARAPAGOS(ガラパゴス)」とソニー「Reader(リーダー)」が相次いで発売され、こちらもニュースで盛んに取り上げられました。今後、パナソニックや東芝、KDDI、NTTドコモなどがそれぞれ電子書籍リーダーを発売するようで、本は紙媒体から一気に電子媒体に移行するかのよう報道です。しかし、現実には電子書籍で読める書籍は著作権が切れた古典といえる作品ばかりで、新刊が販売されるのはごく一部、やはり危惧されていたコンテンツ不足は否めないようです。また、電子書籍リーダーも思ったほど売れていないとの報告を受けています。さらには、既存の出版社は、電子書籍にビジネスモデルが見つからず、相変わらず出版不況で苦悩しています。電子書籍が市場を広げられ市民権を得るためには、今年2011年の動向が鍵を握っていると言えるでしょう。

電子書籍には魅力もあります。例えば、電子書籍の旅行ガイドブックには動画が掲載されており、ホテルやレストランの雰囲気を動画で確認できます。さらには予約もその電子書籍から直接でき、地図も自分が居る現在地が表示されるので目的地まで迷うことはありません。かつ、電子書籍は絶えず更新されるので、古い情報に振り回されることもありません。電子書籍は「動画」や「音楽」、さらには「インターネット」と融合することで、その特長が発揮できると言えます。

実は私も仕事上、電子書籍を作ります。その電子書籍を作る作業

を通じて、改めて紙の本の魅力を感じたと告白させていただきます。電子書籍は当然ですが電力が0になると何も表示されません。ただの箱です。私はよく使うので、二日に一度は充電しなければなりません。また「iPad」や「GARAPAGOS」はけっこう重いものです。今後改良されていくとは思いますが、そうすると今度はパソコンがそうだったように、手持ちの機材が旧式となり、何年かで新しいバージョンに買い換えなければなりません。電子書籍リーダーも同じでしょう。便利にはなるのですが結局お金がかかります。1冊1500円ほどで、何時までも永遠に読める紙の本には、廃れることのない魅力があることを再発見いたしました。

大阪公立大学共同出版会事務局より

大阪公立大学共同出版会は、大阪市立大学および大阪府立大学における教職員と、本出版会の趣旨に賛同する者の自主的な参加を得て、研究・教育成果の発表を助成し、また民間出版社において採算上刊行を引き受けられないような優良学術図書の刊行頒布の事業を行い、学術の振興および文化の発展に寄与することを目的とし、

- (1) 会員の教科書および学術研究報告の刊行頒布
- (2) 会員の学術図書の刊行頒布
- (3) 会員のデータベース、ソフト等電子出版物の刊行頒布
- (4) その他前条の目的を達成するために必要な事業

などを行なっているNPO法人です。参加を希望される方は下記事務局へお問い合わせください。

599-8531 大阪府堺市中区学園町1-1

大阪府立大学中もずキャンパス内

NPO法人大阪公立大学共同出版会(OMUP)事務局

電話:072-251-6533 ファクシミリ:072-254-9539

e-mail:omup@hs.osakafu-u.ac.jp

URL:http://www.omup.jp/

入会金:一口一万円(終身会費)

振込先:三菱東京UFJ銀行 中もず支店 普通 3976510

編集後記

OMUP創立10周年の幕開けにあたって、大阪市立大学理学研究科教授・同大学数学研究所長の河内明夫先生のたいへん興味深いインタビュー記事を掲載することができたのは、おおきな喜びである。平澤栄次常務理事は、先ごろの大病を克服してすっかりお元気になられ、今回のインタビュアーをお務めいただくことができた。これもおおきな喜びである。

金井一弘編集長には、今号にも寄稿いただいた。「電子書籍に対する一考察」であるが、期せずして三田朝義理事長の年頭挨拶でも電子書籍について触れられており、河内先生の対談の中でも電子出版に触れた部分があって、まことにタイムリーなテーマ設定の寄稿であった。

会員諸氏の新年におけるますますのご発展を祈って編集後記を終える。
(N. O.)